

水道ジャーナリスト 有村源介の  
源流 本流 汽水城  
NO.7 トランプホテル



トランプホテルは街のはずれに

空港ロビーにもスロット

フーバー・ダム

2013年9月、ラスベガスで国際オゾン協会（IOA）の世界会議があり、初めてアメリカ本土を訪問した。それまでのUSA訪問と言え、グアム、ハワイといった、アメリカとは言うけれど、観光目的のリゾート島だった。ラスベガスでの宿は、たまたまトランプホテルだった。私は海外旅行の手配は、たまには旅行代理店の窓口で相談しながらホテルを手配したりすることもあるが、ほとんどはお任せで、その道の達人に面倒を見てもらうというパターンである。で、任せていたらトランプホテルだった。手配した方も当然、いくつかの都市ホテルから選んだにすぎない。

トランプホテルは、訪問時には何という事もない、普通のシティホテル、という印象だったが、2017年1月20日以来、つまり、トランプが第45代米国大統領就任をもって、否、選挙戦が進んでいくにつれて「あのトランプの・・・」と言われる有名ホテルになったのである。この場合、トランプの言動により「かの有名ホテルに成り下がったのである」と言えよう。ホテル自身は普通のホテルだから、「かの悪名高い・・・」とは言えない。

雑談の中で、ラスベガスでかのホテルに宿泊したと言うと、相手の反応が一挙に上がる。押しなべて「へーっ」と嬉しそうな表情になるが、それだけの話で中身は何にもない。

部屋は小柄な日本人にとっては、やたら広いばかりで、特段、良いこともなかった。浴槽も大きく、ベッドも大きい。家族で宿泊して炊事するのが普通の様で、一式揃っている炊事道具も大きかった。我々は男2人連れだったが、レストランで食事を取る時、「オンリー1オーダー、シェアするから」と言うので、嫌な顔をしないで、当然のように2人前の食器を用意してくれた。何しろ、かの地の人間と比べると、体格は2分の1に過ぎない。

トランプホテルは、ラスベガスの中心地からは徒歩15分位の、街の外れに位置しており、都合によってタクシーを使ったり深夜でも徒歩で帰ったりした。街の治安は大変良く、不安を感じることはまったくなかった。一説によると、「公共」が治安を維持しているのではなく、ラスベガスの街を実質的に運営しているカジノとホテル共同体(?)が治安も担っ

ているためだという。真偽のほどは分からないが、チンピラやくざが路上で 500 ドル 1000 ドルの小銭を稼ぐことによって、カジノの客足が遠のいては、その何十倍何千倍の儲けが消えてしまうから、というまことしやかな話である。確かに、カジノでサングラスをかけた一見コワモテ風の客に対して、カジノの用心棒と思しき巨漢がスッと近づいて、無言でサングラスを取るように指示し、コワモテ風が慌てたように従う映画の様なシーンを目の当たりにすると、あながちガセネタでもない気がする。

カジノと共に、ラスベガスの繁栄を支えているのがショー・ビジネスとスポーツ・ビジネスだ。日本のショー・ビジネスもロクにみたことがなくせに、と言われそうだが、LIVEに関しては、いわゆる「外タレ」も含め、クインテット（5重奏団）に客が2人といた国内の売れないミュージシャン、演歌、70年代前衛JAZZまで相当数観てきたし、唯一の趣味らしい趣味なので、場数にはいささかの自信がある。目当てはシルク・ドゥ・ソレイユの「ビートルズ」だったが、満席でキップを取れず、「マイケル・ジャクソン～ONE～」を観た。ジャクソン讃歌という内容だったが、歌もダンスも素晴らしく、中でも巨漢の女性ギタリストの演奏が圧巻だった。

もう1つ、ラスベガスを支えているのが、ショーでもスポーツでもないビジネスである。各種の会議や展示会を誘致しており、出席したオゾン会議について言えば、会場の施設、展示会、運営のすべてに抜かりがなく、円滑な国際会議だった。それに加えて、近場にかのフーバー・ダムがあり、グランド・キャニオンも日帰りで十分、堪能できる。

ラスベガスは第2次世界大戦が終わって間もない時代から、紆余曲折を経て、今風に言えば、「トータル・ビジネス・ソリューション」の提供を目指して来たのである。

アメリカを学ぶ場として、社会勉強の場として、これほどの好適地はないと思うが、日本からの研究者、特に国立研究機関や関係団体の研究者、国立大学の教員にとって、ラスベガスへの出張は困難なものだった。その理由は、事務方の「ラスベガスにギャンブルしに出かけるなんてとんでもない」という、それこそとんでもない誤解によるもので、なかなか許可が下りなかったのだ。国際化時代と言われて久しい今日においては、さすがにそのような愚かしい話は聞かないが、実態はどうか。

北大のある売れっ子教授が1週間に札幌と東京を5往復した。久し振りに顔を合わすなり「実はこの前…」と切り出したところを見ると、当然、負担であり、怒りもあったのだろう。5往復の理由は会議の主催者が全部、異なっていたからである。宿泊すれば交通費も時間も体力も無駄にしないで済む。手続き的にも「不可能ではない」そう。しかし、異なった団体間で出張旅費を調整するのに必要なエネルギーは、札幌・東京5往復をはるかに凌ぐらしい。

それが正当である、と勘違いしている無能ぶりは変わっていない。